

令和7年度 学校評価書(共通) 前期

校名 宇和島市立城東中学校

1 自己評価書

教育目標	夢を力にたくましく生きる生徒の育成						
基本方針	コミュニティスクールを活性化させ地域の教育と連携し、保護者や地域の願いを踏まえながら、校内外の諸活動に主体的に取り組み、思いやりの心を持ちたくましく生きる生徒を育成する。また、分かる授業の実現による確かな学力、感動と充実感を味わう多様な集団活動の充実による豊かな心、たくましく生きるための体力の向上に取り組み、変化する社会を生き抜いていく力を身に付けさせる。						
本年度重点目標	1. 学びの充実 2. 豊かな心の醸成 3. たくましく生き抜く力の育成 4. 生徒指導の充実 5. 健康・安全教育の推進 6. 家庭・地域から信頼され、誇りとされる学校づくりの推進 7. 働き方改革の推進						
評価項目	評価小項目	評価の観点	評価資料	評価	評価		
確かな学力の定着と向上	①	全国学力・学習状況調査及び市標準学力調査の活用	各調査の分析結果を基に、「身に付けさせたい力(学習の目標)」の明確化を図り、組織的に推進することができた。	・分析資料の作成 ・具体的な対策の実施		後期のみ	
	②	授業改善	主体的・対話的で深い学びの実現に向け、授業モデル「N見方・考え方を変える」を視点に授業改善に努めた。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	B B B	B	
			ねらいを明確にした分かる授業を行った。	・教師アンケート ・児童生徒アンケート	A A	A	
			一人1台端末(iPad)やEILS(コンテンツバンク等)の活用により、個別最適な学びを推進したり学習内容の定着を図ったりした。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A B A	A	
	③	家庭学習の充実	家庭との協働により、授業と連動させた家庭学習の充実に努めた。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	C C B	C	
	④	読書活動の充実	読書に対する関心や意欲が高まるような取組や声掛けを積極的に行った。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	D A B	B	
	⑤	ふるさと学習及びESDの推進	社会や地域の課題解決や活性化に向けた活動及び調べ学習等を通して、地域に対する誇り・愛着の醸成や、持続可能な社会を創造しようとする児童生徒の育成に努めた。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	B B A	B	
				(成果と課題) ①授業モデル「N見方・考え方を変える」を視点に各教科で授業改善に取り組んでいるが、その頻度や方法については教科によって偏りが見られる。 ②一人1台端末(iPad)やEILS(コンテンツバンク等)の活用については、毎週火曜日のeタイムや各教科の授業での積極的な活用が見られるが、授業と連動させたり家庭でも活用させたりすることが課題である。 ③各学年の図書室の利用が増えており、特に1年生は多く利用していた。反面、図書室で騒がしくすることもあり、図書室利用のマナーを向上させていきたい。 ④1年生の総合的な学習の時間は、オリエンテーションと学級を解体しての班分け、主な計画について話し合うことしかできていない。生徒主体の活動になるようにリーダーを配置しているが、班によって機能している班とそうでない班がある。ふるさと学習を充実させていくのであれば、3年間の活動の充実と生徒の成長を考えれば、縦割り班も視野に入れて計画をしたほうがより効果があると考ええる。また、来年度は市の補助金に頼らず、関財団や県の補助金の申請を行い予算の裏付けのある活動を行えば、思い切った活動が実施できると思う。 ⑤2年生は昨年度に引き続き総合的な学習の時間でキャリア教育をメインに今年度の活動も行うことにした。そのため、昨年度研究した郷土学習を生かし、今年度は県外へ視野を広げたテーマを生徒一人一人が考えたことが良かった。昨年度からのつながりも明確にできたことも良かった。 ⑥3年生は職場体験学習の受け入れ先として多くの事業所が賛同いただけた。生徒が地域のことを知り、地域の方々が城東中学校のことを理解していただくチャンスだと思う。来年度も受け入れていただけるためにも、生徒が一生懸命活動できるよう支援したい。			
				(改善策等) ①授業モデル「N見方・考え方を変える」を視点とした授業改善については、具体的な実施方法等のノウハウを教科間で共有するための研修を充実させる。 ②各教科の宿題として、すららドリル等の学習コンテンツを活用することによって、家庭学習の充実に努めたい。 ③教師アンケートが低かったため、教員のおすすめの本を紹介するなどして、子どもたちに読書を身近に感じさせて、関心を寄せるように働きかけていく。 ④ふるさと学習を通して何を学ばせ、どんなスキルを育てていくのか、学校のビジョンを明確にする。また、活動の幅を広げるため経費の出所を確保したり、活動計画や資料を整備したりする。 ⑤2年生は2学期に調べたことや考えたことが実際はどうかという体験を通して、それぞれの研究のまとめをしっかりと行い、次年度の職場体験学習につなげたい。			

評価項目	評価小項目	評価の観点	評価資料	評価	評価	
生徒指導の充実	①	規範意識の向上	規範意識を高めるための共通理解、共通実践に努め、児童生徒の行動規範が高まってきた。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A A	
	②	児童生徒の健全育成	児童生徒に寄り添った対応を行うとともに、児童生徒同士の人間関係づくりや仲間意識に支えられた集団づくりの推進に努めた。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A A	
				・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A B	
				・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A A	
			いじめの未然防止、早期発見に努めるとともに、迅速且つ適切な初期対応や組織的な対応等により、いじめの早期解決に努めた。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A A	
				・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A B	
				・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A A	
	③	関係機関との連携	スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、こども支援教室わかたけ等の積極的な活用を心掛けた。	・教師アンケート ・保護者アンケート ・児童生徒アンケート	A A B	
	④	自己肯定感 等	自己肯定感を涵養する取組の工夫・改善を具体的にに行った（自分にはいいところがある）。	・教師アンケート ・児童生徒アンケート	A B	
				・教師アンケート ・児童生徒アンケート	A A	
			自己有用感（人の役に立っている）や達成感を醸成する取組により、子どもの意識に変化が見られた。	・教師アンケート ・児童生徒アンケート	A A	
	(成果と課題)					
	①生徒は落ち着いた学校生活を送ることができている。生徒の些細な変化に気付けるような関わりができており生徒に寄り添った生徒指導体制ができている。 ②関係機関との連携においても保護者と生徒の評価に差がある。通信等を通して紹介はしているが生徒にもきちんと伝わるような手立てを考える必要がある。 ③児童生徒の健全育成の項目（不登校）では、教師・保護者と生徒との評価に差があるため、指導の手立ての改善が必要である。 ④学校行事やボランティア活動などを通じて、自己有用感は保たれているが、自己肯定感の高まりにはつながっていない。自己肯定感が低い生徒への対応が必要である。					
(改善策等)						
①教職員が共通理解・連携の下、不登校生徒に対してサポートルームやわかたけを紹介するなど適切に運営していきたい。 ②昨年度と同様に継続して関係機関の通信等を学級担任から紹介したり、HP・マチコミを活用したりするなど工夫していく必要がある。 ④学校全体で前向きな言葉掛けを増やし、自他を認め合える取組を継続して行っていく。						

<評価基準> A 目標を達成 B 8割以上達成 C 6割以上達成 D 6割未満

評価項目	評価小項目		評価の観点	評価資料	評価	評価	
働き方改革	①	ワーク・ライフ・バランス	時間外勤務が月80時間を超える教職員ゼロを目指し、校内で設定した業務改善施策を基に、組織的な働き方改革に努めた。	・教師アンケート	C	C	
				・「出勤・退庁調査」の分析と活用	C		
	②	働きやすい環境づくり	「何でも相談し合える雰囲気づくり」「経験の浅い教職員を皆で支える雰囲気づくり」など、温かく働きやすい職場づくりに努めた。（枠を移動しました。）	・教師アンケート	A	A	
				休業日の設定を含めた計画的な課外活動や部活動等の適切な運営がなされた。	・教師アンケート		A
	③	他の教職員のサポート体制の充実	教職員同士が仕事を手助けしたり、スクールサポートスタッフ、地域人材などを積極的に活用したりして、職場の仕事のサポート体制が充実した。	・教師アンケート	A	A	
	(成果と課題)						
	①6月30日から5時間授業とし部活動終了時刻を早めるなどして、繁忙期の成績処理等に携わる時間を確保することができた。						
	②ノー部活動日を設定し、計画的な部活動運営を行うことができた。						
	③スクールサポートスタッフが印刷、文書の仕分け、校納金等を担当しているため、教員が教材研究等に関わる時間を確保できた。						
	④市外から転入してきた教員が多く、校務支援システム等に慣れることに時間が掛かったことや、行事担当教員等の負担が大きく、時間外勤務が増加した。						
(改善策等)							
①2学期も臨時休業等がなく、授業時数が確保できた場合は、12月から5時間授業とし、繁忙期の時間確保を行う。							
④行事の多い2学期は、行事担当者を複数配置することにより、担当者の業務内容の平準化に努める							
評価項目	評価小項目		評価の観点	評価資料	評価	評価	
地域との連携	①	学校運営協議会の活性化	全教職員に対して、学校運営協議会の役割・目的の周知徹底に努めた(校内体制)。	・教師アンケート	B	A	
				学校運営協議会・地域学校協働活動の活性化(地域・保護者へ)を図り、熟議等の結果を基に、地域の力を学校運営に生かすよう努めた。	・教師アンケート		A
					・保護者アンケート		A
					・地域アンケート		A
	②	情報発信	家庭や地域に対して、教育活動に関する情報を、文書やホームページ等で積極的に発信した。	・教師アンケート	B	A	
				・保護者アンケート	A		
				・地域アンケート	A		
	③	来校・相談体制	来客・電話対応を丁寧に行い、保護者や地域の方々の声をしっかりと聞くことで、来校しやすく、相談しやすい体制・雰囲気づくりに努めた。	・教師アンケート	A	A	
				・保護者アンケート	B		
				・地域アンケート	A		
	(成果と課題)						
	①学校運営協議会の熟議で本校の避難所運営計画を生徒会役員と話し合った様子をホームページで発信することで、学校運営協議会の取組を保護者に理解してもらうことができた。						
②毎日のホームページの更新や学級通信のタイムリーな発信により、学校や学級の様子をリアルタイムに伝えることができた。							
③スクールサポートスタッフと連携しながら保護者や来校者に対して誠実な対応ができた。							
(改善策等)							
①ホームページ等で、今後も学校運営協議会を含めた情報発信に積極的に努めていく。							
③今以上にスクールサポートスタッフと連携を図ったり、丁寧な電話対応を行ったりすることで、来校しやすく、相談しやすい雰囲気づくりに努める。							

<評価基準> A 目標を達成 B 8割以上達成 C 6割以上達成 D 6割未満